



巻頭言

冷害にも強い近代農業技術

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
 財団法人全国農村教育協会 代表取締役会長

廣田伸七

今年（平成15年）は平成5年以来10年振りの冷害に見舞われ大凶作の年となった。7月～8月の長雨と著しい低温と日照不足により、米の作況指数が全国平均で90と著しい不良で、特に北海道が73、青森53、岩手73、宮城69と北の地域が大凶作となった。この結果平成15年産米の全国の収穫量は763万屯程度と見込まれ、日本の米の年間需要量である870万屯に100万屯以上不足すると計算されている。この不足分は備蓄米の放出によって需給に支障を来すことはないが敏感な市場は早くも値上がりし、家計に影響を及ぼしている。天明の大飢饉では餓死者が多数出て一揆や打ちこわしが続発したが、現代は米泥棒という絶対許すことのできない身勝手な盗人が横行し世間を騒がしている。

近代国家となった明治以降「農業は国の基幹産業」として重要視され尊敬もされてきた。ところが最近は商工業や情報産業が国の基幹産業で、農業はややもすると軽視されがちな風潮になっているが、わが国で唯一自給率100%を誇る主食の米が約100万屯も不足する。この100万屯不足ということは備蓄米がないとして単純な計算をすると日本人の食べる米が約1ヶ月半足りなくなるという大問題である。この現実を直面して、国民の関心があらためて「農業は国の基幹産業」であるということを再認識するといった皮肉な結果となった。

若し、今年のような冷害年に化学肥料や農薬、高度の育種や栽培技術がなかったらと考えたら背筋がゾット寒くなった。

日本の稲作は明治時代は全国平均で10a当りの収量が約260kg。大正時代から終戦後の昭和25年頃までは300kgを中心に上下20kg程度で推移

していた。この時代は十分な化学肥料や農薬がなかった時代で豊作年でも330kgが最高だった。昭和24年頃から優れた化学肥料、27年頃から近代的な殺菌・殺虫・除草剤などが開発されたために昭和30年以降米の収量は飛躍的に増加し、350kgから400kg、450kgと数年間隔で伸び、遂に昭和59年に517kgと明治時代の約2倍に達し、現代では平年作で520kg、豊年作で537kg、地域によっては616kgまでに増加し、化学肥料や農薬がなかった頃に較べると約1.7倍～2倍の増加となっている。如何に近代科学に支えられた育種や栽培技術、化学肥料や農薬の貢献度が大きいかを示す数字であり、これらの技術や農業資材によって冷害をも克服してきたのである。

例えば昭和16年の冷害では作況指数88で収量は269kg。20年の冷害では作況指数67で収量208kg。これに対し化学肥料、農薬が進歩した平成3年の冷害で作況指数95で収量470kg、平成5年の冷害で大凶作といわれた作況指数74でさえ収量367kgと如何に近代の農業技術や農業資材が冷害をも克服するかを示すデータである。

最近は化学肥料や農薬を使った米作りはとすると嫌われ、有機無農薬栽培がもてはやされているが、米の10a当りの収量の飛躍的増加は近代科学技術によって造りだされた化学肥料や農薬のお蔭である。そしてこうした資材を使った米作りが50年以上も続けられ米の安定供給に貢献しその米を食べ続けてきた日本人の寿命は年々伸びている。それなのに何故化学肥料や農薬がいたずらに嫌われるのか、冷害の年にあたり国民の生命維持に直接関係する米の生産のあり方について、消費者、生産者ともに科学的な目で見つめ直してもらいたいと願うものである。